



## ミルクティー

もう数年前の事になるけれど、友人でも家族でも、恋人でもない人がいた。

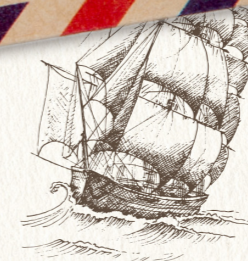
出合いのきっかけは仕事を通じてだったけれど、それ以外で会うことも多くあった。年も離れていたし、お互いの生い立ちに共通点も特になかった。その人が今までどんな道を歩んできたのかもあまり知らなかったけれど、その人に目をじっと見つめられて何か言われると、なんだか妙に納得してしまう、そんな不思議な感覚がある人だった。

いつかの年の冬の終わり、ふとスマホの画面を見るとちょうど日付が変わって、0:00という数字と日付が目に入ってきた。その人の誕生日だった。そういえばあの人は何歳になるんだっけ、なんてことを考えながらも特に連絡することもなく画面を裏返しにした。数日後に会う予定があったし、直接渡そうと思って買っておいたプレゼントもあった。描きやすそうで手に馴染みそうなボールペンと、シンプルなデザインの小さなノート。その人はいつも何かメモを取る時、インクの出が悪いペンで左手の甲に書いていたから。私はいつもそれを痛そうだな、と思いながら見ていた。

数日後、その人に会った。最寄駅すら覚えていないが晴れた日の午後なのに少し薄暗くて天井が高い、海外の図書館のようなカフェだった。私の前にはその日のおすすめだと言われたどこかの国のブレンドコーヒー。その人は「今日は朝からコーヒーを飲みすぎたから」と言って、頼んだ生クリームに乗ったミルクティーが深い色の木製テーブルに置かれた。

Moon River

11



適当な話をしている間も、私はその人がなんとなく機嫌が悪い事に気付いていた。多分他の人は気付かない程度の差なんだろうけど、他の人と比べる機会なんかないのになんとかこの不機嫌さは私しか気付かないものなんだろうな、と考えたりした。なんとなく居心地が悪くて、私はあまり目を合わせないように会話を続けた。頼んだコーヒーのカップの底が見えてきた頃、バッグからプレゼントを取り出して、「そういえば、これ、お誕生日おめでとうございます」と言って渡した。

何秒経ったか分からないけど、返事が返ってこない。私は言うか言わないか迷った挙句、「あの、何かありましたか?」と聞いた。それでも沈黙が続いたので、私はいよいよ心配になってきてそわそわしながらその人の顔を、その日はじめてしっかりと見た。

そしてとても驚いた。薄暗さの中でもわかるくらいに瞳が潤んでいて、今にも泣き出しそうな顔をしていたから。きっと余程のことがあったのだろうと思い、自分の口が乾いていくのを感じながら、その人が何か言葉を発するのをただ待った。

「誕生日の夜、どうして連絡をくれなかったの?」

「え?」

私は言われた言葉がよく理解できずにポカンとしてしまった。するとその人は慌てて笑顔を作り、「冗談だよ、ところでプレゼント開けていい?」と今度は子供のように無邪気にはしゃぎ出した。そしてまたきっと私にしかわからないくらいの、寂しさが伝わってきた。

その日は帰宅しても、なんだかずっとモヤモヤしていた。自分で言うのも変だけれど、きっとそこまで鈍感な方ではないと思う。私とあの人は、誕生日の夜に必ず連絡が必要な間柄でも、それがなかったからといって不機嫌になるような間柄でも絶対ない。なのにあんな顔をさせてしまった事になんとか罪悪感を覚えつつ、そんな気持ちを落ち着かせる為に夜なのにまたコーヒーを淹れてしまった。

もしかしたら私の想像が及ばないような孤独があって、もしかしたら最近他にも色々なことが重なって、心細くて、誕生日の夜に一人で、誰かからの連絡を、何かを試すような気持ちで待っていたのかもしれない。もしかしたら。

変な時間のコーヒーの所為なのかなんなのか、その日はなんだか夜が長く感じた。

昼間に飲んだ異国のブレンドコーヒーと、甘ったるそうなミルクティーが並んだテーブルをじっと見つめていたせいか、その光景が何度も浮かんで来ては消えていった。

azufeling